



介護体験を

聞く会



ホームページ
<http://www.yanagida-kaigo.co.jp/>

会報第185号

平成29年5月15日発行

発行所…(有)明寿会

住所…川崎区中島1-13-3

電話044-2333-0061

*定例会は最終土曜日です。

今月は5月27日(土)です。

『三々五々館』開館式開催のご報告

平成29年4月29日
(土)の午前10時より、
約2時間にわたり『三々五々館』開館式が行われました。

快晴の日の朝から地域の方々(当施設ご利用並びにご入居の方や御家族、中島町内会会長様・旭町町内会老人会会長様・しおん地域包括支援センター



様、ボランティア活動で当施設で音楽を披露して下さっている先生方、施設スタッフ)70名近くが参加して下さいました。

始めに、柳田診療所を始めたとして介護施設を発展させるに至った経緯を、かつて地域活動で施設の必要性を訴えて町内の方々と活動した写真のスライドを交え、柳田院長より紹介がありました。懐かしい顔ぶれやかつての活動を知る良い機会となったのではないかと思います。

地域の町内会の方々からは、行政に頼るのではなく、地域の中でも支え合う関係が大切になっていく時代だとの言葉を頂きました。

ボランティアの先生方か

ている。認知症の方の御家族の抱える悩みを自らの体験から話して頂き、周囲の方々も聞き入って



旭町町内会老人会長の挨拶

いる場面がありました。

様々なお話を頂いた後に柳田の各施設にて行われている集団ケアの実践を

参加者の方々で行いました。参加者の方々の声が音楽ホールに響き、明治から昭和にわたつての時代の歌ではありますが、それぞれが記憶している、そして歌うなかで教訓を感じ取れる『うさぎとかめ』『桃太郎』『戦友』を皆さんとリアン(毛糸で編んだ長い紐の輪)を回しながら歌いました。

グループホームの入居者さんが披露して下さいました。

『犬棒かるた』では下の句を答える方々の活き活きとした顔つきを見ることが出来ました。

その後音楽ボランティアの先生方よりそれぞれピアノ演奏、唱歌合唱、音楽療法の披露を行って頂くと、いつも以上に大きな声が発生され、普段声を出す機会が少ない方も含めて笑顔で歌に合わせた振り付けや手拍子、そして自ら歌われていた事が印象的です。音楽の持つ力を介護で活かし、その活動を広められたらと願ったすばらしい時間となりました。

最後に、隣同士で手を繋いで頂き、『荒城の月』をそれぞれぬくもりを感じながら歌って頂く事が出来ました。

ご来場頂いた方々、また、地域から見守って下さった方々に感謝し、会館式のご報告とさせて頂きま

柳田ダイケア 杉山



司会で挨拶する杉山主任



本田音楽療法士の演奏



受け付け担当者



会場風景



手の絆で荒城の月



わくわくプラザ交流会

3月31日に柳田デイケアにて、わくわくプラザとの交流会が実施されました。「わくわくプラザ」とは市内各小学校にあり、児童の遊びや生活の場を確保する事業です。

今回は旭町小学校内にあつたわくわくプラザとの初めての交流会でした。春休み中という事もあり、1・2・3・6年生の16名の元気な子供達が「けん玉をみせてあげたい」という思いでデイケアに来てくださいました。

初めてデイケアに来て下さる子や旭町小との交流会で「来た」とあるよ。」と話してくれる子もおり、各々の自己紹介から始まりました。6名の子供達がけん玉の得意技を披露し、成功すると「おっ。すごいね。」と利用者様の歓声が響きます。中でも、小指姫、と言う玉を前に振りだし、けん玉を持つ手の突き出した小指

に玉をさす難しい技を見て「もう一回見せてよ。」と見入っている利用者様もおりました。大勢のおじいちゃん、おばあちゃんに囲まれている緊張もあり、失敗してしまふ子には「頑張れ！もう一回！」と掛け声も飛び交います。

デイケアでは馴染み深い、うさぎとかめ、の歌に合わせて、けん玉を操り技を見せられる子供達に利用者の方々はとても喜び温かい目で見守っておられました。

子供達が輪の中の間に入り、デイケアで毎日行っているリリアンを回しながら、鉄道唱歌と一緒に歌いました。子供達は、この日の為にこの歌を練習して来て下さったそうで、とても有難く思いました。続いて、桃太郎、を歌いながらお手玉を隣の方へ渡していく遊びをしました。リズムに合わせて隣にお手玉を送っていくのは難しく、曲が終ると「あれ？2個も持つてる。」(手元に)

お手玉がない。」なんて声も上がり笑いが絶えない時間となりました。帰り際、子供達が利用者様と一人一人握手をされました。「勉強頑張るんだよ。」「有難うね。」子供の両手を握り「ばんざーい。」と満面の笑みで話し掛ける利用者様。「また来たい！」と言ってくれる子供達。その様子を見ている私も職員もとても微笑ましく思いました。

毎回思う事ですが、改めて子供達のパワーには大人を元気にさせる秘めたる力があるのだなと感じました。核家族が進み、若い世代の方にとつてもご老人との交流というのは中々ない昨今、子供達にはご老人をいたわる優しい気持ちを持つて欲しいです。又、利用者様には元気を貰って頂きたいという思いから、このような交流を大切にできればと思います。

「地域の認知症サポート体制づくりをめざして」

パーソンセンタードケ

アから老人福祉村づくり「認知症は記憶川の流れの断絶ということ」

「認知症は記憶川の流れの断絶ということ」

「認知症は記憶川の流れの断絶ということ」

「認知症は記憶川の流れの断絶ということ」

症の不安は、通常不安とは質が違うのである。記憶の川の流れの断絶からくる不安であり、人間が経験したことの不安である。何かで置き換えて解決するものでも、誰かがおしえてくれるものでもなく、記憶中枢の生まれてから現在までの記憶の川の流れが断絶する大脳の病状であり、集団の中で「なじみ現象」によって安心をする事以外には解消されない不安である。しかし、記憶の川の流れが断絶しても、認知症になつても、不安を助長しない周辺環境が確保されておれば安心が保たれるのである。それ以上の進行も防止される病気である。それがグループホームなどの集団ケア生活なのである。

「量的蓄積が判断の質をつくる」

記憶の量的蓄積が大脳活動の高度な質を獲得する。発明なども長年の記憶の量的蓄積のおかげ。この膨大な量的蓄積(99%の汗)が1%のインスピレーションを産む。

この記憶の川の流れがな

んらかの理由で途絶すると、大脳の活動で断絶がおきる。それで未来が見えなくなり、不安になる。その理由に多いのは大脳の不使用による廃用性萎縮。現代では定年退職などによる社会的交流の断絶、社会との交流の低下が大脳血流の低下をもたらし、大脳細胞の萎縮や脱落をもたらし断絶をもたらす。つまり社会交流の低下は大脳血流量の低下につながり、記憶の断絶につながる。記憶の流れの途絶は認知症発症で、判断力低下、認知症、不安につながる。放置すると家庭問題から地域社会問題へと発展していく。「介護者は常識人ではだめである」

識人からみると間違いを指摘されることである。しかし介護専門家は周辺症状を受け止めることができ、かつ対応ができる人々である。なぜならその周辺症状が中核部分の記憶中枢の萎縮から来ており、その不安を「なじみ」づくりや「時間」をかせぐことでやり過ぎることができていることを知っているからである。

ここで間違いを起こすのは、利用者の中に常識人が混入しており、周辺症状をヘルパー並に指摘する時である。新米ヘルパーはその常識人利用者にひっぱられて同調してしまう。その結果、同席する他の認知症者がストレスをこうむることになる。

と進めることである。そのためには利用者の積年の生活史を知り、歴史的背景を知り、自らがその先輩から学ぶ子弟の立場となつて溶け込むことである。一段高い位置からの視点をそなえ、一方で地域を支えた先輩方から謙虚に学ぶ姿勢をもつことができればどうかである。

常識人ケアは巷の生活感、勸善懲悪はある。利用者とも共通している。しかし周辺症状は勸善懲悪では解決しない。背景に病気からくる不安をうけとめ、なじみ現象をつくり、集団欲の満足や、集団活動による不安感の解消などの安心感を与え、事を考える。さらにいえば、長年の生活史のなかで常識人以上に感じていることが多数あるのも認知症者であり、せめて日中数時間を過ごすデイサービス生活では不安なく過ごしていただく。そのためには音楽、リハビリ、回想などでストレスのない時間を保障したいものである。

我々は医薬品も抑制や興奮ではなく、認知症者をまもる漢方医的医薬品生活を考える。

「現状評価」

*それまでのデイサービスは職人さん（男性）が全体を見渡せる位置に座り、睥睨し職員の仕事に常識介護を行っていた。つまり新米職員の思わくと職人の思わくが抱きあつた介護環境になつていった。常識人介護（専門家意識欠如介護）であつた。それは男性に従順であり、かつ認知症者があり、女性である方のはストレスは変わらない。したがって職人ケアからの脱却が新たな目標だつた。

*弱者優先デイサービスへ常識的判断を移行し、事務担当者で職場統括リーダーの区別を明確にしていく。パーソンセンタード・ケアを意識することである。さらには全市民が認知症対応力とサポート体制づくりをめざす。それは市町村全体で老人福祉村づくりである。

.....

◎音楽ホールの利用を考へて、



「音楽ホールの活用」

4月に音楽ホールが完成した。今後はその一段のレベルアップした音楽ホールの利用を研究する専門集団づくりがのぞまれる。異部署の職員同士が共同作業してホールへ移動する計画をたてる。ホール活動をプログラム化する。音楽やリハビリや紙芝居や映像などの他にも日常生活の一環として地域住民の生活を取り入れた内容を認知症生活に取り入れていく。その活動実践を繰り返して、学んだことを振りかえつて新たなプログラムとしていくこと。